

異世界 子育てしながら冒険者します

ゆるり紀行

2

Minazuki Shizuru
水無月静琉

シルフィール

タクミを異世界に転生させた風の神様。

フイト

タクミの契約獣となった飛天虎。小型にもなれる。

ボルト

タクミの契約獣となったサンダーホーク。

タクミ・カヤリ

異世界に風神の眷属として転生した本作の主人公。アレンとエレナの保護者。

グランヴァルト・ルーウエン

ガディア国騎士団シーリン支部の隊長。

エレナ

兄・アレンとともにタクミに保護された少女。格闘術が得意。

ジュール

タクミの契約獣となったフェンリル。小型にもなれる。

巫女姫

人魚族の神聖職に就任するお転婆な少女。

ミレーナ

人魚族の女性。タクミにお願いをしに現れる。

アレン

タクミに保護された少年。格闘術が得意。

登場
CHARACTER
人物

第一章 街で過ぐすつ。

「タクミさん！」

「あれ、ルーナさん？ どうしたんですか？」

シーリンの街の冒険者ギルドに入った途端、何故か受付係のルーナさんがカウンターから飛び出してきて、がっちり僕を腕つかを掴んだ。

エーテルディアという異世界に転生した元日本人の僕は、双子の兄妹と思われるアレンとエレナを森で保護して以来、冒険者生活を送っている。

危険度最高ランクの森——ガヤの森で行われた騎士団主体の討伐遠征から戻ってきた翌日、依頼の完了手続きと報酬の受け取りのために、冒険者ギルドを訪れたんだけど……。

ちよっとルーナさん!? これは一体、何事ですかあー？

「あなたのことを待っていたの!! さあ、ギルドマスターのところへ行くわよ! ほら早く! アレンくん、エレナちゃんもこっちにいらっしやい」

「……え、え? ちよっと!？」

ルーナさんは僕の腕を引っ張って歩き出した。

ギルドマスター？ 何のことだ？

わけがわからないまま、ルーナさんにギルドの奥——ギルドマスターの執務室へと引っ張られる。

「っ!! お、おにーちゃんー!」

アレンとエレナも僕を追いかけて、とことこ慌ててついてきた。

ルーナさんはギルドマスターの執務室の前で立ち止まり、扉をノックした。

「マスター、タクミさんがいらっしやいましたのでお連れしました」

「ああ、入ってくれ」

用件を伝えると、すぐに中から男性の声が返ってきた。

今がギルドマスターの声かな？

ルーナさんが扉を開けると、正面にある机に白髪交じりの初老の男性がいるのが見えた。

男性は椅子から立ち上がり、僕達を部屋へと迎え入れる。

「私はシーリンの冒険者ギルドのマスターをしている、ヨハンだ」

彼がギルドマスターか……。

「お初にお目にかかります。タクミ・カヤノです。この子達はアレンとエレナです」

相手は僕のことを既に知っているようだが、一応名乗っておく。

「君がタクミ殿か。とりあえず、座ってくれ」

「はい。では、失礼します」

ギルドマスターが部屋の中央にあるソファアへ座るように促してきたので、僕はそれに従って二人掛けのソファアの真ん中に腰を下ろし、両脇にアレンとエレナを座らせる。

その間、ギルドマスターは小声でぼそぼそと何かを呟っていた。

「……この男が？ そうは見えんな……。しかし、ルーウエン殿とルドルフ殿が言うのだから間違いないか……」

ヴァルト様とルドルフさん？

内容はよく聞き取れなかったが、二人の名前が出ただけはわかった。

「……えっと？」

「ああ、すまん。いや、ルーウエン殿とルドルフ殿から、君のランクを下位のままにしておくのはまずいと言われてな。あの二人がそう言うのだから君には相応の実力があるんだろうが、失礼ながら、私にはそれほど強いようには見えんのだよ……」

ギルドマスターの用件は僕のランクについてだった。

そういうえば、ガヤの森でヴァルト様とルドルフさんが話していたな。

ガディア国騎士団シーリン支部の第二隊長グランヴァルト・ルーウエン様と、冒険者パーティ『ドラゴンブレス』のリーダーでAランクのルドルフさん。

二人は、ガヤの森での僕らの戦いぶりを見て、早いところランクアップさせようとか言っていたっけ。

それにしても、対応が早いなあ。

二人に言われて僕に直接会ってみたものの、本当に強いのかどうか測りかね、悩ましげな表情をしている、ということか……。

「悪く思わないでくれ。私はもともと事務上がりのギルドマスターでね。自分では大して戦えないのだ。とはいえ、長年多くの冒険者を見てきたので、それなりに強さを見分ける目は持っている。自負していたのだが……君は今まで見てきた冒険者達と違って……よくわからんだ……」

冒険者相手に「強そうに見えない」なんて言ったら、怒る者もいるのだろう。

ギルドマスターは申し訳なきそうにしていたが、僕自身も強そうに見えないのは自覚しているの
で気にしていない。

というか、僕を転生させた風の神シルフィールの力でドーピング的に強くなっているのだから、強そうに見えないのは当たり前だと思っっている。

実際に、転生前の僕は運動神経が壊滅状態だったからね……。

だから、ギルドマスターの中の強者の基準みたいなものが、僕に当てはまらないのは仕方がないことだ。

あとは強い人特有の雰囲気？　そういうのがないからかな？

僕には「少しずつ強くなっていた」という努力の過程がないため、修練の積み重ねで生じるオーラなんてものは備わっているはずがないのだ。

「……まあ、実力に間違いのない二人からの推薦だからな。君をAランクにしようと思っっている」

「へえ？　Aランクっ!?!」

今僕はEランクなので、二つ上がってCランクくらいにはなれるかな……と思っっていたんだが、まさかAランクとは！

あまりに驚いて、変な声が出してしまった。

強そうに見えないって言っていたわりに、ギルドマスターは思い切った判断をしますね……。そんな簡単にランクを上げていいんだろうか？

「試験とか、そういうものはないんですか？」

「ルーウェン殿とルドルフ殿が実力を確認しているので問題ない。それに、君はブラッディウルフやイビルバイパーを倒しているのだろう？」

貴族であり騎士団隊長のヴァルト様や、高ランク冒険者のルドルフさんといった身分のしつかりした人が僕の実力を保証したとはいえ、所詮は人づてに聞いた情報にすぎない。

だが、ギルドマスターはそれを簡単に受け入れた。

ヴァルト様やルドルフさんのことを、よっぽど信用しているのだろう。

「それでAランクですか？」

「ギルドマスターの権限で上げることができるのは、Aランクまでだ。複数のギルドマスターの認可が必要なSランクにするのは、さすがに無理だぞ」

「いえいえ！　不満があるわけではないです」

逆です、逆っ！　思っていた以上にランクが上がって驚いたんです！

誰もSランクにして欲しいなんて思っただけですからっ！

「聞いた話によると、その子供達も強いんだってな。どうする？」

「……どうする、ですか？」

一瞬、言われている意味がわからなくて首を傾げる。

「子供のランクも上げることは可能だが、小さい子が変に高ランクだと不審がられるだろう。だからといってEランクのままだと、パーティを組んでいる君に高ランクの依頼を受けてもらうことができない」

ああ、なるほど。そういうことか。

パーティランクはメンバーの平均になるから、僕がAでアレン達がEだと、パーティランクはえつと……「Dランク」になるのか。

僕としてはそれで問題ないのだが、ギルド側としてはAランク冒険者に低ランクの仕事しか受けてもらえないから、もったいないってわけだな。

その気になれば、ギルドマスターは利益を優先して、問答無用でアレンとエレナのランクを上げることができはるはずだが、わざわざこちらの都合を聞いてくれている。それは、とてもありがたいことだった。

ちらり、とアレンとエレナを見ると――

「んにゅ？」

二人はニコニコしながら大人しく座っていて、全く警戒している様子がない。

アレンとエレナは、人の悪意に非常に敏感だ。その二人が怯えたり警戒したりしていないのだから、

ら、ギルドマスターが良識のある人物だということは間違いないのだろう。

それならば、と僕は妥協案を出すことにした。

「こちらとしては二人のランクは今のままでもいいのですが、僕らの請け負う仕事限定されるとギルドとしては困るということでしたら、アレン達のランクを一つだけ上げてDにするのはいかがでしょうか？」

「ふむ。そうなると、パーティランクは……Cだな。それが妥当か……」

アレンとエレナがDランクなら、僕らのパーティはCランクになる。依頼は自分のランクの一つ上まで受けることが可能だから、Bランクまで請け負えるわけだ。

Aランクの仕事はそう滅多にあるものではないので、これなら大抵の依頼を受けられる。

「うむ。では、それで手続きをしておこう。――おい！ 誰か！」

僕の妥協案は受け入れられたようだ。

ギルドマスターが部屋の外に向かって声を掛けると、すぐにルーナさんがやってきた。

「お呼びですか？」

「ああ。ルーナ、ランクアップの手続きを頼む。タクミ殿をAランク、子供達をCランクにな」

「えっ!? Aランクですかっ！ タクミさん、凄じじゃない！ 冒険者登録をしてからこんな短期間でAランクに昇格なんて快挙よ！ 快挙！」

ランクアップの手続きを指示されたルーナさんが、一気にテンションMAXとなり、自分のことのように喜んでくれた。

「……そ、そうですね」

だが、あまりにハイテンションでアレンとエレナはもちろん、僕も驚いて、それ以上の言葉が出てこない。

「おい、ルーナ。落ち着け」

はしゃいでいるとも取れるルーナさんに、ギルドマスターから冷静なツツコミが入った。

「あら、いやだ。すみません。ちよつと興奮しちゃいましたわ」

静かに窘められ、ルーナさんは即座に我に返る。

何だかこのやりとりが、二人の間では普段からよくあることのように感じられるのは、僕の気のせいではないと思う……。

「それじゃあ、受付に行きましようか」

僕は正気になったルーナさんとともにギルドマスターの執務室を後にし、受付カウンターへと向かった。

受付に着くと、ルーナさんはすぐに水晶板を操作し始めた。

「じゃあタクミさん、手続きをするからギルドカードを貸してちょうだい」

「はい、お願いします。アレンとエレナもカードを出そうか」

「うん。……はいー」

僕がルーナさんにギルドカードを差し出したのに倣い、アレンとエレナもそれぞれ自分の鞆を

探つてギルドカードを取り出し、少し背伸びしてカウンター越しに渡した。

「ふふっ。ありがとう」

ルーナさんは僕達のカードを受け取り、ランクアップの手続きを開始する。

「えっと……あら？　ちよつと!?」

だが、手続きを始めてすぐ、ルーナさんが驚いたような声を上げた。

そして作業を中断して周りを見渡すと、カウンターから身を乗り出してくる。

「タクミさん！　あなた達、土の迷宮を攻略し終えていたの!?」

「えくと……そうですね〜」

あーあ、バレた……。

そうだな。ギルドカードに迷宮記録が残るってことをすっかり忘れていた。

「タクミさん達が迷宮に行ったのって、確か遠征前の一度だけよね？　あの数日だけで攻略しちゃったの!?」

「……まあ、そうですね」

「ちよつとヤダー！　それって最速記録じゃない!?」

「そうなんですか？　それはちよつとわからないです」

今までの最速記録がどのくらいなのかは知らないが、僕達はアレンとエレナのおかげで道に迷うことなく最短経路で進むことができたから、確かにその可能性はあるな。

アレンとエレナは勘で道順を決めていたように見えたものの、二人は水神の子供である可能性が

濃厚なので、無意識のうちに何らかの特殊能力を使って道を選んでいたのかもしれない。

僕がシルフィール——シルに授けてもらった能力の一つであるマップ機能。迷宮内は実際に行ったことのある場所しか表示されないが、それを見た限りでは最短ルートだった。

「ルーナさん、迷宮攻略のことは黙っておいてもらえませんか？」

幸い、ルーナさんは周囲を気にして小声で話してくれていたもので、誰にも聞かれていない。ルーナさんさえ黙っていてくれれば、人に知られる心配はないだろう。

「……どうして？ 普通なら自慢することよ？」

「これ以上注目を浴びて、アレンとエレナが絡まれるような事態は避けたいので……」

あまり注目されることは本意ではない。

たださえ僕は先程Aランクになり、通常では考えられないほどの短期間でランクアップした冒険者として注目を集める可能性があるのだ。

これ以上、話題になるようなことは避けておきたい。

「……そうね。イビルバイパーを倒したあなたに喧嘩を売る人はそうはいないと思うけれど、どこにでも馬鹿っていろいろはいるものね」

以前、このギルドで僕らが冒険者のドミニクに絡まれたことを思い出したのだろう。ルーナさんは複雑そうな表情で溜め息をついた。そして、そのまま何言わずに手続きを再開する。

どうやら、ルーナさんは黙っておくことを了承してくれたらしい。

「……以上で、ランクアップの手続きは終わりね。そして、これが遠征の報酬よ」

「ありがとうございます」

ランクの更新に続いて、本来の目的であった依頼完了の手続きもしてもらい、僕は少なくとも報酬を受け取った。

さて、これで僕の用件は終わりだ。そう思っていたら——

「さあ、タクミさん！」

ルーナさんが何かを期待するように目をキラキラさせ、両手を広げて待ち構えていた。

「えっと……何でしょう？」

やり残したことってあったらだろうか？

……うーん、ルーナさんと何か約束した覚えはないんだけどなあ。

「素材よ、素材〜！ イビルバイパーの素材があるんですよ！ それにブラッディウルフ。その他にも、ガヤの森で採ってきた素材を売ってください。タクミさんがたくさん持つて、ルドルフさん達から情報は得ていますう！ それに迷宮の素材もあるのよね？ それも売ってちょーだい！ 私、タクミさんが来るのを待っていたのよおー！」

ああ、そういうことか。

確かに遠征の依頼を受けた時に、ルーナさんから「いっぱい採ってきてくださいね」なんて言われていたわ。

そうだな。レッドウルフやブラッディウルフの素材は持つていても仕方がないので、売ってしまつていいだろう。

あとは薬草とか？ アレンとエレナが頑張ってたくさん採ってくれたから、ある程度は売ってもいいかな？

というか、ギルドマスターだけでなく、ルーナさん達職員も僕がイビルバイパーを倒して、それを持っていくことを知っているんですね。

ルーナさんはルドルフさん達から聞いたって言ってたけど、この様子だと《無限収納》の存在も知られているだろうな。それなら、躊躇う必要はないか。

「さすがに、ここでは素材を出せないですよ？」

「ああ！ そうね、ごめんなさい。でも大丈夫よ！ イビルバイパーでも出せるように、一番大きい倉庫を確保してあるから！ 今、倉庫に案内するわ」

イビルバイパーは大きいからな。ここで取り出すと大変なことになるのは目に見えている。しかも、Aランクの魔物だから周囲の人々に注目されてしまうし。

それを察したルーナさんはカウンターから飛び出し、僕らを倉庫に連れて行こうとした。

既に倉庫がばっちり確保されているとは、準備万端だな……。

「おにーちゃん」

「ん？」

アレンとエレナが僕の服の裾を引っ張った。

「どっこのー？」

「大きい蛇が出せる場所だって。疲れた？」

「だじょーぶ」

「そっか。あと少しで終わるから、もうちょっと待っててな」

「うん、わかったー」

僕はアレンとエレナの頭を撫でてから、二人を連れてルーナさんの後を追った。

そうそう、僕が預かるかたちで保管していたイビルバイパーは、騎士団と三組の冒険者パーティ全ての人達が権利を放棄した。タクミの戦利品にしてくれ、と言って。

イビルバイパーの皮は、斬撃や魔法への耐性がある優れもの。骨はとても硬く、武器や防具の素材にもってこいだ。血や内臓は薬の材料となり、肉は高級食材。質も良いし、巨大な体躯であるため量もある。

これらの素材を全部売れば、とんでもない金額になるはずだ。

さすがに一体丸々受け取るのは抵抗があったため、遠慮したんだけど……誰も取り合ってくれなかった。

そんなわけで、イビルバイパーは僕が全て貰うことになったのだ。

「ここよ」

僕達が案内されたのは、ちよつとした体育館くらいの大きさの建物だった。ここがギルドで一番広い倉庫のようだ。

確かにこれだけの広さがあれば、イビルバイパーを真っ直ぐに伸ばすことはできないにしろ、胴を少し曲げれば充分に置ける。

ルーナさんがあらかじめ声を掛けていたのか、解体するための職員達が既に集まっていた。……うん、やる気満々だな。

まあ、あれだけ大きい魔物を買収しようとするとするならば、解体要員くらい用意しておくか……。だが、先に確認しておかないといけないことがある。

「ルーナさん、イビルバイパーの素材は自分達用にも残しておきたいんですけど……」

必要性を感じなかったから、僕達は今まで防具類を着用していなかった。

普通のシャツとズボン、ジャケットに厚手のブーツ。あとはシルから貰った魔道具の装飾品を着けていたくらいで、いかにも「冒険者です」といった格好はしていない。

アレンとエレナも似たような服装だ。

だけど今回のガヤの森の遠征で、アレンとエレナが不意をつかれたとはいえ魔物の攻撃を受けたのを見て、やはり装備を一式揃えたほうがいいかなあ、と思った。

重苦しい鎧はあり得ないけど、革製の胸当てとか、籠手とか……。身体の一部だけでも守れそうなものを用意しようかなと思ってる。

あとは、ほぼ蹴りで戦うスタイルのアレンとエレナのために、頑丈なブーツもだね。

それらを作るなら、イビルバイパーの皮はもってこいの素材だろう。

「んぐっ！ 全部ではないですよね!? 少しは売ってくれますよねっ!?」

僕がイビルバイパーの素材売却を渋ると、ルーナさんが喉を詰まらせて慌てた。

随分取り乱しているけど、イビルバイパーの素材が手に入らないとそんなに困るのかな？

「あの、何かあるんですか？」

「実は……遠征でイビルバイパーを倒したという噂を聞きつけた商人ギルドの人達から、しつこく買い付けの連絡が来ているんです」

ああ、そういうことか。

たぶん、同行した冒険者パーティや騎士達がどこかで話したのを聞いて、すぐに冒険者ギルドに問い合わせたのだろう。

イビルバイパーの素材は高価だが、それでも飛ぶように売れるって話だしな。

確実に儲かる素材だ。利に聡い商人が欲しがるのは無理ないか。

「大きいですからね。もちろん、僕達だって全部必要ってわけじゃないですから、必要な分以外はちゃんと売りますよ」

「本当ですか！ ありがとうございます！」

僕は自分達を使う分くらいの素材があれば問題ないので、それ以外はもともと売る予定だった。

「じゃあ、出しますよ」

話が決まったところで、早速取りかかろう。

イビルバイパーの血も大事な素材なので、《無限収納》から取り出す時には、胴の切り口があらかじめ用意されていた器の上に来るように気をつけた。

倉庫内に出されたイビルバイパーの体軀を見て、「うわ〜」「……大きい」「すげえ！」と、職員達の口から言葉が漏れる。

「ほら！ みんな、呆然としてないで解体を始めてちょうだい！」

ルーナさんの声で我に返った職員達が、一斉にイビルバイパーにナイフを突き立て始めた。僕の気のせいではなければ、ルーナさんが人一倍大きな声を張り上げて驚いていたはずなんだけどな……。それなのに、冷静に指示を出すなんて……さすがプロだ。

ルーナさんの切り替えの速さに呆気に取られている間に、イビルバイパーの皮はどんどん剥がされていった。

イビルバイパーの表皮は、生きている時より死後のほうが格段に捌きやすくなる。

とはいっても、ミスリルやオリハルコンみたいな上質な素材で作られたナイフでないと刃が刺さらないし、それなりに力が必要なので解体するのはとても大変そうだ。

「解体には時間がかかるわ。どこをどれだけ売却するか、買い取り金額はいくらかなどの話は、解体が終わってからしましょう。素材は一旦ギルドの倉庫で保管しておくので、明日また来てくれるかしら？」

確かに、解体が終わるまでには結構な時間がかかるだろう。

その間、ずっと待っているとなると、アレンとエレナが退屈しそうだ。

ギルドに任せてもいいのなら、そのほうが僕としてもありがたいな。

「わかりました。あと、これも売却をお願いします」

僕はルーナさんの提案を了承し、売却しようとしていた素材——レッドウルフにブラッディウルフ、ジャイアントボア、グレートモンキー、あとは薬草各種を《無限収納》^{インベントリ}から取り出した。

遠征で得たものだけでなく、エーテルディアに来た当初にガヤの森で手に入れた魔物もこっそり交ぜたが、そんなに量は多くないし、一緒に売却してしまってもバレないだろう。

「きゃー……！！」

「うにゃー！」

僕が取り出した品々を見たルーナさんが喜びの悲鳴を上げた。

その声にアレンとエレナが驚いて僕の足にしがみつきの、毛を逆立てた仔猫こねこのようになってる。

「アレン、エレナ、大丈夫だよ。ほら、落ち着け」

「うにゅ〜」

まあ、少し撫でてあげたら警戒を解いたけどな。

イビルバイパーを解体していた職員達も何事かと手を止めてこちらを見ていたが、僕の出した素材を見て納得したのか、一瞬目を丸くしたものの、すぐに解体作業へと戻った。

「ガ、ガヤの森の素材がこんなに……！！ いいの？ いいの？ タクミさん、これ全部買い取りで構わないのね!？」

「え、ええ」

「本当ね!? もう取り消しは受け付けないわよ！」

ルーナさんは嬉々ききとして、素材を別の倉庫へ運ぶように指示を出す。

今、出した素材の売却金も、明日まとめて支払われることになったので、僕は倉庫を出ようとしたのだが――

「あっ、ちょっと待って！ うっかり忘れていたんだけど、職人ギルドの木工部門の部門長がタクミさんに会いたって言っていたわ」

ルーナさんに止められ、そう告げられた。

職人ギルドとは、その名の通り職人達が登録するギルドで、所謂^{いわゆる}商工会のような組織だ。その組織の中では、職種ごとに部門が分けられている。

たとえば――

木工部門――大工や家具職人など、木材加工を専門とする職人が集まる。

鍛冶部門――剣や槍といった武器や、鍋やフライパンをはじめとした調理器具など、金属加工を

専門とする職人が集まる。

調理部門――料理人やパン職人など、食を専門とする職人が集まる。

医療部門――治療師や薬剤師など、医療を専門とする職人が集まる。

――などなど、他にも各種様々な部門がある。

職人ギルドは情報の共有と統制をしたり、各部門に仕事や弟子を斡旋^{あつせん}したりして、職人同士に繋がりを持たせ、技術を発展させようとしているのだ。

「職人ギルドが僕に会いたい、ですか？」

「ええ。タクミさん、ガヤの森の大木を持ち帰っているのでしょうか？ たぶん、それを売って欲しいって話だと思うのだけど……」

えっ!? ルーナさんは、僕が魔法で切り倒してしまった木を回収していることまで知っているん

ですか？

しかも、冒険者ギルドだけにとどまらず、それが職人ギルドにまで伝わっているってことですよね？

イビルバイパーとか、木のこととか……どれだけ情報が駄々漏れなんですか……。

いや……人の噂って凄いな……。広がり方が尋常じゃない。

だって、遠征が終了してからまだ一日しか経っていないんだよ？

「……わかりました。職人ギルドにはこれから行ってみます……」

「そう？ じゃあ、よろしくね」

僕は情報の漏洩っぷりに肩を落としながら、冒険者ギルドを出た。

職人ギルドはここから大して離れていないから、今から行って相手の用件を聞いてしまったほうが手間にならないだろう。

「アレン、エレナ。行こうか」

「はーい」

◇ ◇ ◇

「すみません。木工部門の部門長さんにお会いしたいのですけど」

「面会のお約束はされていますか？」

早速職人ギルドを訪れると、僕は受付カウンターに向かい、その女性に簡潔に用件を伝えた。しかし、女性はこちらからさまに怪訝けげんそうな表情をしている。

見覚えのない人物が突然アポなしで訪ねてきて、部門長に会わせろと言えば怪しいかもしれないが、受付をしているのなら表情くらい何とか取り繕繕って欲しい……。

「いいえ。ですが、部門長さんから会いたいというお話をいただいていますか？」

「お名前を伺うかがってもよろしいでしょうか？」

「あ、すみません。タクミ・カヤノです」

「し、失礼致しました！ ただ今、部門長を呼んで参りますので、少々お待ちいただけますでしょうか？」

「はい、わかりました」

僕が名前を告げると、受付の女性はがらりと雰囲気を変えて謝罪した。

どうやら僕が訪ねてきたら呼ぶようにと、部門長からあらかじめ伝えられていたらしい。

「タ、タクミ・カヤノ殿ですか！」

受付の女性が席を立ててから、さほど時間を置かず大柄の男性が現れた。

ここまで慌てて走ってきたようで、ぜえぜえと息を切らしている。

「ええ、そうです。えっ……と、木工部門の部門長さんですか？」

「ああ！ 失礼しました。木工部門・部門長のガリオンです。さ、早速ですが!! ガヤの森の大木！ ガヤの木をお持ちだと聞いたんですが、それは本当ですかっ!？」

「……ええ」

部門長の用件はやはりガヤの森の木のこと、それを売って欲しいと言われた。

それはそれは前のめりの体勢でね。僕が思わず背を反らすくらいの勢いだった。アレンとエレナも部門長の勢いに驚き、僕の後ろに避難していたよ。

やはり、ガヤの森の木は素材としても良い品のようだ。

太く大きい木なので、くり抜いたり削ったりして繋ぎ目のない家具を作ることができる。

その上、魔素を含んでいるため、耐火などの付与魔法を施ほすことも可能なんだって。

だから、ガヤの木から作られた品はどれも高値で取り引きされているらしい。

しかし、ガヤの森は危険な場所だ。森の外周に生える木を切り倒すとしても、いつ魔物が現れるかわからない。常に警戒する必要がある。

戦闘力がなければ当然、護衛を雇わなければならない。

それにガヤの木はとにかくデカイので、一本の木を切り倒すだけでもひと苦労だし、その後には運ぶのにも相当な労力を要する。

だから職人自ら危険を冒おかしてまでは木の確保に向かわないもの、素材があるとなれば、喉から手が出るほど欲しいというわけだ。

部門長さんが、興奮しながら熱くそう語ってくれたよ。

だけど、説明はそのくらいで構わない。これ以上、専門的な話をされても僕はわからないからな。「売るのはもちろん構いません」

「ほ、本当ですかっ!？」

「え、ええ……」

ガヤの木は、目的があつて持っているわけではない。ルドルフさんが「もったいないから持って帰れ」と言ったので、回収したに過ぎないし。だから、売ることに問題はない。

むしろ、買ってくれると言うのであれば、喜んで手放す。

「この裏手に倉庫がありますので、まずはそちらで現物を見せていただきますでしょうか!」

「あ、はい。わかりました」

僕は部門長さんの案内で、裏手にある倉庫へと移動する。

そして倉庫に入ると、職人らしき人達が大勢いた。どうやら、ガヤの木を拝みたい人々が集まっているようだ。

聞いたところによると、僕と部門長さんが受付で話している間に、倉庫に集まるようにと通達されていたらしい。

そういえば部門長さんが現れた時、受付の女性は戻ってこなかった。彼女がこの職人達を集めたのだろう。

だとしても、たった数分でこの人数は集まりすぎのような……いや、気にしないほうがいいか……。

職人達の集合具合は無視し、僕はまず《無限収納》から一本のガヤの木を取り出して、空いているスペースに置いた。

うん、何とか倉庫内に収まったって感じた。

『うおおおおおおおー!!』

「!!!」

僕が木を出した途端、複数の雄叫びみたいな野太い声が倉庫内に響いた。

当然のごとくアレンとエレナが驚き、僕にしがみついていた。というか、僕も驚いた。

今日は人の叫び声だけで何度も驚かせてしまつて、アレンとエレナには可哀相なことをしている。とりあえず、撫でて宥めておこうか。

僕が子供達を落ち着かせている間、職人達から「すげえー立派な木だ」「夢にまで見た素材がつ!」「触つていいかな?」と様々な台詞が聞こえてきた。

——歓喜。その言葉が一番しっくりくる様子だ。

「これほど立派な木は、今までに見たことはありません。やはりガヤの木は最高ですね!」

部門長さんも感動していた。しかも、体をふるふると震わせて。

職人達のざわめきは一向に収まりそうにないが、僕はさっさと値段の交渉をして帰りたい。

部門長さんに買い取り価格のことを尋ねると、予想外の答えが返ってきた。

ルーナさんにあらかじめガヤの木の相場を聞いておいたのだが、部門長が提示したのはそれを大幅に上回る値段。

どうやら、ルーナさんが教えてくれた値段は、ガヤの木でも外周に生えている木の最安値だったらしい。

ガヤの木は森の中心部へ行けば行くほど大きくなり、さらに魔素を多く含む良質なものになるんだってさ。

僕が倒した木は二日ほど森の中を進んだ場所にあつたので、辛うじて伐採できる外周の木よりも数段、質の良い木材になるそうだ。

言わなければもっと安い値段で手に入っただろうに、職人達は馬鹿正直に、木の査定を行っている。少しでも安値で仕入れようとする商人とは違い、根っからの職人ということかもしれない。

「くっ……。残っているうちの予算では、三本買うのがやっとです」

三本か……。数十本あるうちの三本。全然、数が減った感じがしないけれど、仕方がないか。

僕にとつては不要な木だが、無償で全ての木を譲るわけにはいかない。値崩れを起こして市場が混乱するだけだからな。

僕は追加で三本の木を《無限収納》から取り出した。

「タ、タクミ殿、一本多いです」

最初に出した一本があるから、今、倉庫内には全部で四本の木が置かれている。

「まあ、おまけてことで」

「そ、それは申し訳ないです」

全部は無理だけど、一本くらいならタダであげて問題にならないだろう。そう思つての行動だ。部門長さんは僕の言葉に驚き、恐縮はしつつも表情はとても嬉しそうだった。

喜んでいるのは間違いないと思つたので、僕はそのまま押し切るかたちで三本だけの料金を受

け取り、足早に職人ギルドを後にした。

職人達に活気があるのはいいことだと思ふんだが……。なんだか疲れてしまった。

今日はもう宿に戻り、アレンとエレナを構つて癒されよう。

◇ ◇ ◇

「ギョウゴウ、ギョウゴウ」

翌日、僕達は早い時間から冒険者ギルドに向かった。

アレンとエレナは朝からご機嫌で、スキップしながら道を歩いている。

「おにーちゃん。きょう、おそといくー?」

二人が言う「おそと」とは建物の外ではなく、街の外のことだ。

「あゝ、今日は素材の売却金を受け取るだけで、依頼を受けるつもりはないんだよな」

どうやら、アレンとエレナは遊びに行きたいらしい。

昨日と同じく、今日これからするのは事務的なことだ。昨日は大人しく待つていてくれたけれど、やはり子供には退屈な時間になってしまう。

「そうだなー。今日の用事が全部終わったら、ちよつとだけ街の外に連れて行ってあげる。だから、それまでいい子で待つていられる?」

「うんー」

二人は笑顔で力強く頷く。

「アレン、まつー」

「エレナもまつー」

「うん、いい子」

頭を撫でてあげると、アレンとエレナはさらに笑みを深めてはにかむ。

「えへへ」

二人が喜んでいることだし、さっさと用事を済ませよう。

「ぎんごう、ぎんごう」

さらにご機嫌になったアレンとエレナとともに冒険者ギルドに入ると――

「待っていたわー」

「え!？」

ギルドの扉を開けた途端、待ち構えていたルーナさんに捕まった。

入り口で仁王立ちって……。僕達はギルドに来る時間なんて告げていなかったのに、ルーナさんはいつからここに立っていたのだろうか……。

「さあ、さあ！ 行きましょう！」

「はあ!? ちょよ、ちょよと……ルーナさん!？」

昨日に引き続き、僕はルーナさんに引っ張られて強制的に歩かされた。

「ほらほら、アレンくんもエレナちゃんも早くいらっしやうい」

「「まつてー」」

ルーナさんの力は地味に強く、しかも、逆らってはいけない雰囲気かまを醸し出していた。

アレンとエレナもきちんとしてきているので、これは大人しく連行されたほうが良さそうかな？

僕達が連れて行かれたのは、会議室のような個室だ。

席につくと、ルーナさんから数枚の書類が手渡された。

それには僕が昨日渡した素材の名前がずらりと並んでいて、それぞれの買い取り金額が記載されている。

「これが昨日、タクミさんから預かった素材の買い取り金額の内訳ね」

確かに、さらっと見る限り、昨日渡したものの内容に間違いないようだが……。

「どう？ 素材は渡したのに、一覧に載っていないなんてことはないと思うんだけど？」

「はい、問題ないと思います。でも、ルーナさん。これって解体費用が引かれていないんじゃないですか？」

確か、解体しないで売りに出した魔物は、解体費として料金が引かれるはずだ。

なのに、この書類には解体費分の料金が書かれていない。

「無料よ、無料！ タクミさんは貴重なガヤの森の素材をあんなに持って来てくれたのよ。解体費用なんてちまちましたものは取れないわ」